

発達障害児のための集団心理療法「もくもくグループ」の検討：CBCL・WISC IIIによる子どもの行動特徴と認知的特徴の縦断的検討

田中，沙来人
九州大学大学院人間環境学府

小澤，永治
九州大学大学院人間環境学研究院

吉川，桃子
九州大学大学院人間環境学府

座間味，愛理
九州大学大学院人間環境学府

他

<https://doi.org/10.15017/1448904>

出版情報：九州大学総合臨床心理研究. 4, pp.69-75, 2013-03-29. 九州大学大学院人間環境学府附属総合臨床心理センター
バージョン：
権利関係：



発達障害児のための集団心理療法「もくもくグループ」の 検討

— CBCL・WISC IIIによる子どもの行動特徴と認知的特徴の縦断的検討 —

田中沙来人 九州大学大学院人間環境学府 / 小澤永治 九州大学大学院人間環境学府

吉川桃子 九州大学大学院人間環境学府 / 座間味愛理 九州大学大学院人間環境学府

遠矢浩一 九州大学大学院人間環境学研究院 / 針塚 進 九州大学大学院人間環境学研究院

要約

本研究では、集団心理療法「もくもくグループ」における臨床的意義と課題を検討するために、グループに継続して参加した児童・生徒の行動特徴・認知的特徴の発達について、CBCL・WISC IIIを用い縦断的検討を行った。3年間のCBCLの縦断的検討を行った結果、初年度に境界域を超えていた項目において、有意に得点の減少が見られた。また、WISC IIIにおいては動作性IQ、全検査IQ、知覚統合の有意な上昇が見られた。もくもくグループの中でねらいとした、①他者に受け入れられる体験や、②自分の気持ちを他者と共有したり、他者の気持ちを聞いて自分の気持ちと折り合いをつけるなど円滑な相互交流をする体験、③セラピストの状況理解の促しといったものの影響が示唆された。

キーワード：発達障害、グループセラピー、WISC III、CBCL

1. 問題と目的

(1) 軽度発達障害児の情緒面および、行動面の発達の問題

平成15年に文部科学省の実施した全校実態調査では、小中学校の通常の学級に在籍している児童生徒のうち、LD、AD/HD、高機能自閉症により学習や生活の面で特別な教育的支援を必要としている児童生徒が全国で68万人、約6%の割合で存在する可能性が示されている。発達障害と言われる子どもたちに対しては、「状態像は様々であり、周囲の環境によって変化することも多いため、個性的かつ弾力的な指導及び支援が必要」との見解から、①特別支援学級による指導、②通級による指導、③巡回による指導など、多軸的な特別支援教育が検討されてきた（文部科学省中央教育審議会2005）。

発達障害にまつわる臨床現場では、広汎性発達障害や自閉症スペクトラムという言葉がよく用いられるようになってきており、「対人的相互交流

の障害」「言語および非言語的コミュニケーションの障害」「想像性の障害」の3つの特異性を有する発達障害として理解されている。特に近年は知的障害を伴わない高機能自閉症やアスペルガー症候群といった子どもたちに焦点が当てられるようになった。知的な機能の遅れを伴った“従来の自閉症”の状態像とは異なり、高機能広汎性発達障害は正常発達からの認知面や言語発達での隔たりが少ない。したがって彼らは比較的通常の教育や社会に参加する機会が多いが、周囲からの理解や配慮がなければ二次障害を引き起こしやすいのが現状である（黒田，2004）。生活の中心が学校現場にある児童期においては、彼らの対人的な関わりの特異性や苦手さから、学級内でトラブルメイカーとして扱われる、いじめなどの被害的体験がある、逆に学級内では極力自己を抑えてふるまうといった子どもたちも少なくない。またそのような否定的な体験が積み重なることにより、暴力・性行為といった外向性の行為障害や、自傷行為・

パニック・気分障害・不登校にみられる適応障害といった内向的な二次障害に結びつきやすいと言われている。

(2) もくもくグループ

対人関係に難しさを抱える児童・生徒への臨床的取り組みはさまざまな形で取り上げられている。九州大学大学院人間環境学府附属総合臨床心理センターでは、対人関係に難しさを抱える児童・生徒を対象とし、平成8年(1996年)より「もくもくグループ」を開設し、彼らの対人関係と集団活動参加への困難さに焦点を当てた集団療法を行い、同時に彼らに対するアプローチ法を検討してきている(川村ら, 2002)。遠矢(2006)は、軽度発達障害児を対象としたグループセラピーを実施することの意義として、①居場所の確保、②友人関係の体験、③相互性の体験、④遊びの要素、⑤臨床心理学的視点・受容と共感、を挙げている。

発達に何らかの困難を抱えた思春期児童の仲間づくりを促すグループセラピーについて述べる際に、思春期という視点から子どもたちを同性の仲間集団に帰属し、遊び、親密で理想化された友情を強く求めている。しかし、現実には、学校を中心とした日常場面ではそうした関係を築くことはたやすくはない。そうした実状を子どもたち自身が意識し、劣等感や不適応感を意識している、すでに仲間関係を築くことを諦め、拒否的になっていると理解し、これらを前提としてセラピーに取り組んでいる。その中では、①居場所の提供、②劣等感、自尊心の低下への援助、③器質的障害に起因する行動面への援助が取り上げられている。これらの問題に対し、臨床的な報告(中島・柳, 2010)は挙げられているが、実証的な研究は行われていない。

本研究では、集団心理療法「もくもくグループ」における臨床的意義と課題を検討するために、グループに継続して参加した児童・生徒の認知的特徴の発達・情緒面および、行動面の発達や問題について、WISC III・CBCLを用い縦断的検討を行

うことを目的とする。

2. 方法

参加者 もくもくグループにX年度～X+2年度に参加したメンバーのうち、全ての年度に参加しWISC IIIおよびCBCLを実施した21名(男性16名、女性5名、平均年齢12.19歳(SD=2.13))を分析対象とした。

尺度 本研究では子どもの情緒と行動の問題を全体的視野に立ち検討する立場から、Achenbach(1991)が開発し、世界58か国で標準化がなされている、CBCLを使用した。日本でも井潤ほか(2001)によって信頼性および妥当性が確認され、標準化がなされている。

CBCL/4-18(Achenbach, 1991)は社会的能力尺度と問題行動尺度から構成されており、社会的能力尺度は、子どもの趣味や友達関係、家族関係など生活状況、問題行動尺度は118の質問項目と書きこみ可能な1項目から構成されている。これらの質問により評価される症状群尺度は、「ひきこもり」、「身体的訴え」、「不安/抑うつ」、「社会性の問題」、「思考の問題」、「注意の問題」、「非行的行動」、「攻撃的行動」の8つの軸からなり、さらに「ひきこもり」、「身体的訴え」、「不安/抑うつ」からなる内向尺度、「非行的行動」と「攻撃的行動」からなる外的尺度と総得点がある。これらの得点は標準化されたT得点に換算され、66点を境域、その下は正常域、70点以上は臨床域と評価される。これらの結果から、子どもの情緒面及び行動面の発達や問題の特徴を一目で包括的につかむことができ、さらに対象年齢がひろいことから追跡調査によるその子どもの変化を観察することが可能とされている。

WISC III (Wechsler Intelligence Scale for Children-Third Edition)とは、言語性IQ、動作性IQ、全検査IQによって知的能力を包括的に精査する知能検査である。12の下位検査とそれらからなる、「言語理解」「知覚統合」「注意記憶」「処

理速度」の4つの郡指数により発達の特徴についてアセスメントすることができる。

もくもくグループでは、毎年度6～7月に全参加メンバーに対して、各担当セラピストがWISCⅢを実施している。これにより、クライアントの認知的発達の在り方を継続的に査定するとともに、セラピストのクライアントの認知的特徴の理解を把握することを促している。

グループセラピーの構造 参加する子どもは、電話による面接・相談申し込み、インテークチームによる受理面接を経て、カンファレンスにおける検討の後、本グループが適当とされた場合に参加となる(遠矢, 2006)。グループは隔週1回、午前中に行う。保護者とともに来談していただくが、子どもたちの活動と保護者の活動を分けて実施している。グループ活動は、構造化された活動場面と非構造化された自由時間に分けられる。活動場面においては遠矢ら(2006)が説明するように、一人の子どもに対して一人のメインセラピストが配置されると同時に、子ども—メインセラピストのペアを支援するためのコ・セラピストを設けている。また、グループに対しリーダーが置かれており、グループの進行や、グループメンバーに対する介入を行っている。

3. 結果

(1) 年度におけるCBCL得点の変化

CBCLの下位尺度、内向T得点、外向T得点、T得点について、年度(X年, X+1年, X+2年)を要因とした対応のある1要因分散分析を行った。結果、「社会性の問題」($F(2, 20.42)=5.30, p<.01$)「注意の問題」($F(2, 24.47)=5.57, p<.01$)「非行的行動」($F(2, 7.85)=3.98, p<.05$)「攻撃的行動」($F(2, 82.22)=5.92, p<.01$)「T得点」($F(2, 128.27)=6.47, p<.01$)「外向T得点」($F(2, 108.32)=4.67, p<.05$)において有意差が得られた。LSD法による多重比較を行ったところ、全てX年度よりX+1, X+2年度の得点が低いという結果が得られた(Table1)。

(2) 年度におけるWISCⅢ得点の変化

①参加者の認知的発達の特徴

X年度の参加者のIQは、言語性、動作性、全検査を含め標準域であり、言語性—動作性間の大きな差も見られなかった。分布はIQ=50～69の軽度の遅れの水準が2名、IQ=70～79の境界域が3名、IQ=80～89の平均の下の水準が2名、IQ=90～109の平均域が11名、IQ=110～の平均の上の水準が3名であった。

②年度におけるWISCⅢ得点の変化

WISCⅢの言語性IQ、動作性IQ、全検査IQおよび各郡指数、下位尺度得点の値について、年度(X年, X+1年, X+2年)を要因とした対応のある1要因分散分析を行った。結果、言語性IQ (F

Table1 各年度のCBCLの平均値(標準偏差)と分散分析結果

	X年度		X+1年度		X+2年度		分散分析	
	平均値	(標準偏差)	平均値	(標準偏差)	平均値	(標準偏差)	F値	多重比較
ひきこもり	3.5	(2.0)	2.9	(2.2)	2.6	(2.4)	2.6 ns	
身体的訴え	1.9	(3.0)	1.4	(1.4)	1.4	(1.6)	0.5 ns	
不安/抑うつ	8.9	(5.4)	7.2	(5.1)	7.6	(5.8)	1.9 ns	
社会性の問題	8.3	(2.9)	7.1	(2.8)	6.3	(2.3)	5.3 **	X<X+2
思考の問題	2.0	(1.7)	1.3	(1.1)	1.3	(1.1)	2.5 ns	
注意の問題	10.1	(3.4)	9.2	(3.1)	7.9	(2.6)	5.6 **	X<X+2
非行的行動	2.7	(2.5)	2.0	(1.8)	1.4	(1.4)	4.0 *	X<X+2
攻撃的行動	13.3	(7.4)	11.1	(5.3)	9.2	(6.4)	5.9 **	X<X+2
T得点	70.6	(7.5)	67.4	(5.3)	65.6	(6.3)	6.5 **	X<X+2
内向T得点	66.7	(8.0)	64.2	(6.7)	64.2	(8.2)	2.1 ns	ns
外向T得点	66.9	(9.5)	64.4	(7.2)	62.2	(7.5)	4.7 *	X<X+2

** $p < .01$, * $p < .05$

(2, 385.78) = 7.23, $p < .05$), 全検査IQ ($F(2, 384.02) = 6.27, p < .05$), 知覚統合 ($F(2, 361.40) = 6.25, p < .05$), 絵画配列 ($F(2, 15.35) = 3.50, p < .05$) において有意差が得られた。LSD法による多重比較を行ったところ, 全てX年度よりX+1, X+2年度の数値が高いという結果が得られた。(Table2, Table3)

4. 考察

(1) 年度におけるCBCL得点の変化

X年度のCBCLの特徴より, 社会性の問題・注意の問題が臨床域に達し, 不安/抑うつ・攻撃的行動が境界域に含まれた。参加者の抱える発達上の特徴として「社会性の問題」「注意の問題」があり, それらの特徴をもつことにより日常生活の中での対人的交流の問題が起これ, 対人的交流の回避や不安・抑うつに結びついているのだと考えられる。

石倉(2001)は, 対人関係をうまくとれないと

いったコミュニケーションが困難な子どもたちの困難さについて, 「他者に注目することができずに状況の理解ができなかったり, 自己表現が唐突で一方的であったり, 人前での自己表現ができない」といったことが対人関係上の問題につながると指摘している。その対人関係上の問題により, 他者に自分の考えが受け入れられない体験が積み重なり, 対人的交流の回避や日常の不安・抑うつにつながったのではないかと考えられる。岡嶋(2006)のいう「すでに仲間関係を築くことを諦め, 拒否的になっている」様子が見られた。

X+2年度には, 外向尺度および多くの変数が有意に低下し, 子どもの行動の改善が見られる。「注意の問題」「非行的行動」「攻撃的行動」に関しての有意な低下の背景として, 発達障害児の特徴とメインセラピストとコ・セラピストによる援助が背景にあると考えられる。

多動性・衝動性の高いHFPDD児童の対人関係面における問題点として, 他者との関係において

Table2 各年度のWISCⅢの平均値(標準偏差)と分散分析結果

	X年度		X+1年度		X+2年度		分散分析	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	F値	多重比較
言語性IQ	95.2	(16.4)	94.4	(18.0)	97.4	(15.9)	1.2	
動作性IQ	92.9	(22.5)	99.5	(21.5)	100.9	(24.1)	7.7 *	X<X+1, X+2
全検査IQ	93.5	(17.8)	96.7	(18.7)	99.5	(19.8)	6.3 *	X<X+1, X+2
言語理解	95.3	(17.0)	95.8	(18.1)	98.6	(16.7)	2.6	
知覚統合	97.0	(22.4)	102.9	(22.1)	105.0	(25.3)	7.2 *	X<X+1, X+2
注意記憶	90.6	(15.3)	88.5	(15.1)	93.4	(18.5)	0.3	
処理速度	86.9	(17.2)	92.5	(18.1)	92.4	(18.2)	1.6	

** $p < .01$, * $p < .05$

Table3 各年度のWISCⅢの平均値(標準偏差)と分散分析結果

	X年度		X+1年度		X+2年度		分散分析	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	F値	多重比較
知識	9.2	(3.1)	9.6	(2.2)	9.9	(2.2)	0.8	
類似	10.1	(3.3)	10.8	(3.7)	11.1	(3.5)	1.0	
算数	9.2	(3.1)	8.4	(2.9)	8.9	(3.2)	1.1	
単語	9.1	(4.1)	8.7	(3.5)	9.7	(3.5)	1.3	
理解	8.2	(2.9)	8.2	(4.1)	8.5	(3.1)	0.2	
数唱	8.7	(2.4)	7.9	(3.2)	7.9	(3.3)	1.2	
絵画完成	10.5	(3.7)	11.4	(3.6)	11.4	(3.4)	2.0	
符号	7.0	(2.6)	8.0	(3.2)	7.6	(3.1)	2.1	
絵画配列	9.9	(4.2)	11.2	(4.1)	11.5	(4.9)	3.5 *	X<X+1, X+2
積木模様	9.6	(4.0)	10.1	(4.4)	9.9	(4.4)	0.7	
組合せ	8.4	(4.1)	9.1	(3.7)	10.1	(4.7)	2.6	
記号探し	9.0	(4.3)	9.6	(3.7)	9.7	(4.1)	0.3	

** $p < .01$, * $p < .05$

柔軟な行動をとることの苦手さ、すなわち行動コントロールの問題がある。そのため、日常生活においては他者との関係においてトラブルが生じる機会が多くなりやすく、問題児として見られやすい。また、生まれながらにもつ対人関係の取りにくさに影響されて、他者から疎外される経験を積んできた事があり、他者とぶつかり合う場面への不安感が高い(遠矢, 2006)と指摘されている。このような行動コントロールの問題は、他者の気持ちや考えを理解できないことから引き起こされることが多い(遠矢, 2006)と指摘されている。石倉(2001)も、「他者に注目することができずに状況の理解ができなかったり、自己表現が唐突で一方的であったり、人前で自己表現ができない」といったことが対人関係上の問題につながると指摘している。このように他者への注目の難しさや行動のコントロールの難しさが、「注意の問題」「非行的行動」「攻撃的行動」としてあらわれている。もくもくグループの中では、2人のセラピストによって、他者への注目を促す関わりや、衝動的に行動してしまう場面での制止と適切な行動の提示等をおこなっている。こうして、発達障害児の苦手な場面の中で援助していくことにより他者への注目や自己表現のコントロールを獲得していったことが、行動面の変化に現れたのだと推測する。

「社会性の問題」は有意に低下したが、X+2年度もまだ境界域にある。発達障害児の特異性としてあげられている「対人的相互交流の障害」は色濃く残るものの遊戯療法を基盤としたグループアプローチによりその程度は低減する可能性が示された。プログラム中はセラピストが、同年代の子どもとの関わりの中で他者の意図理解や適切な表現を援助しておりその中で、対人的相互交流の問題が低減していつているのだと考えられる。

(2) 年度における WISC III 得点の変化

初年度(X年度)の特徴より、グループ参加児のIQはすべて標準域であり、能力間の有意な

ギャップも見られなかった。

3年間の変化から、動作性IQ、全検査IQ、知覚統合の有意な上昇が見られた。

詳細に見ると、絵画配列すなわち「状況から結果を予測する力」の有意な上昇がみられた。遊戯療法をベースとしたアプローチにおいても、状況理解の発達が促されるという認知発達への促進的効果がある可能性が示された。もくもくグループでは、メインセラピストやコ・セラピストの存在により、①状況理解を促す関わり、②他者の意図を伝える関わり、③自分の意見を相手に伝わりやすいようにまとめる援助、といった関わりをセラピストの役割として分担することにより行っている。グループの中でセラピストによるプログラム内での現在の状況や周囲の様子についてのフィードバックを受ける経験から、状況を捉える視点を獲得しその中で結果を予測する力も獲得しているのではないかと考える。

(3) まとめと今後の課題

3年間の集団心理療法によって、情緒的安定のみならず、行動上の問題および状況理解について有意な改善が見られた。

集団遊戯療法の中での集団を構成する他児との現実的な相互作用やセラピストの援助の中で、状況理解の成長、日常場面での情緒面・行動面の安定といった変化が見られた。

社会性の問題に関しても改善が見られるが、境界域にとどまっている。社会性の問題は発達障害における重要な課題である。もくもくグループを継続していく中での変化は見られているが、児童期から思春期に入るにあたり、友人関係の複雑化、自己受容の問題などがあり、継続的な援助を行うことが重要と考えられる。

しかし、今回の調査ではCBCLに関して親に対する質問であるため、セラピーのフィードバックにより子どもへの見方が変わったことも影響として考えられる点やセラピー場面での行動変容と日

常の行動の変化に関する検討が行われていないといった点が課題として残された。

今後は、もくもくグループに参加しているメンバーの長期的な変化や、臨床的な研究との関係も検討する必要があるだろう。

謝辞

本研究にご協力くださいました対象児と保護者の皆様に心より感謝申し上げます。

引用文献

- Achenbach, T. M. (1991) Integrative Guide to the 1991 CBCL/4-18, YSR, and TRF Profiles. Burlington, VT, University of Vermont, Department of Psychology
- 針塚 進・遠矢 浩一 (2006) 軽度発達障害児のためのグループセラピー ナカニシア出版
- 石倉 健二・岡島 一郎・鬼東 良太郎・古賀 聡・松成 めぐみ・山野 留美子・川村 由紀・田中 浩司 (2001) コミュニケーションの困

難な子どもたちに対する集団心理療法の試みとその効果, 発達臨床心理研究, 7, 15-26

- 加藤 厚 (1983) 大学生における同一性の諸相とその構造 教育心理学研究 31 (4), 292-302
- 中島 俊思 (2009) 対人相互交渉に消極的な小学校高学年軽度発達障害児へのグループセラピー, 九州大学総合臨床心理センター紀要, 第1号, 89-106
- 大久保 智生・加藤 弘通 (2005) 青年における個人—環境の適合の良さの仮説の検証 教育心理学研究, 53 (3), 368-380
- 大久保 智生 (2005) 青年の学校への適応感とその規定要因—青年用適応感尺度の作成と学校別の検討一, 教育心理学研究, 53 (3), 307-319
- 中央教育審議会 (2005) 特別支援教育を推進するための制度の在り方について, 文部科学省ホームページ

(受理: 2012年3月31日)

A Study on a Group “Mokumoku” group psychotherapy for children with developmental disabilities
— Longitudinal study of cognitive features and behavioral characteristics of children by WISCIII and CBCL. —

Sakito TANAKA, Eiji OZAWA, Momoko YOSHIKAWA, Airi ZAMAMI

Graduate School of Human-Environment Studies, Kyushu University

Koichi TOYA, Susumu HARIZUKA

Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University

The purpose of this paper was to examine the role of group psychotherapy “Mokumoku” with the growth of behavioral and cognition characteristics of the students who participated continuously in the group, by using a longitudinal study with the WISCIII and CBCL. As a result of a longitudinal study of the CBCL for three years, in items beyond the boundary in the first year, there was a significant decrease in the score. In addition, As a result of the WISCIII are indicating that have significantly increased FIQ, FIQ, PO. From these results, the influence of the following three points are suggested. The first point is the experience that is acceptable to others. Second, it's come to terms with the feelings and to share their feelings with others. The third point is that the therapist is for members to encourage understanding of the situation.

Keywords: developmental disabilities, group therapy, WISC III, CBCL